

『心の目を開かれて』 エペソ人への手紙1章15～19節 2015.9.27(主日礼拝説教より)

『…私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。』エペソ 1:17

パウロはエペソ 1:3～14 で、神様からの驚くばかりの霊的祝福について書いた。私たちが父なる神に愛され、選ばれおり、御子の贖いによって罪赦され、神の子とされる道が開かれ、信じた者の祝福が聖霊により永遠に保証されるという！ 17 節からパウロは、この祝福の神を知ることができるようにと祈り始める。すでに神の愛も贖いも保証も知っているクリスチャンへの、この祈りは、信じた者は、生涯をかけて、その神の愛の素晴らしさを、もっと深く、広く、さらに豊かに知ることができると教えている(エペソ 3:17～19)。あなたは今、何を願う？ ソロモンは、神に何でも欲しいものを願え！と言われ、長寿も富も、敵へ勝利も願わず、『善悪を正しく判断する知恵』を求めた(Ⅰ列王 3:9～10)。私たちが神との正しい関係を願い、神ご自身を求める時、天国の祝福はもちろん、地上の生涯の慰めに満ちた祝福も添えて与えられる。

◆人は「神」を勝手に想像する。残酷な神、たったり呪ったりする恐ろしい神…。しかし本当の神は、自ら人となって世に来られ、私たちと言葉を交わし、目に見える姿で教えてくれてこそわかる。人として世に来られたキリストだけが、本当の神を教えてくれた。『空の鳥を見てご覧！野の花を見てご覧！何の働きもない鳥を愛して養い、明日は焔に投げ込まれる花をこんなにも美しく装う神は、あなたがたに、もっと良くしてくださるお方(マタイ 6:26～27)』だと。

◆目の前の理不尽な日常や残酷な現実を見つつも、空を仰いで神の恵みを想い、御言葉に足元を照らされて歩める！神の愛は、聖書を勉強して知るというより、苦難の中で御声を聞いて慰められ、悲惨の中で祈って解決が与えられ、孤独の中で「わたしは共にいる」と語りかけられて安心する…そこで初めて実感できる！「望み(18 節)」は単数形で定冠詞がついている。本当の希望は世にはなく唯ひとつ！神の臨在と知恵、日々の助けのこと。神の愛は常に具体的で实际的！永遠へと続く慰めである！